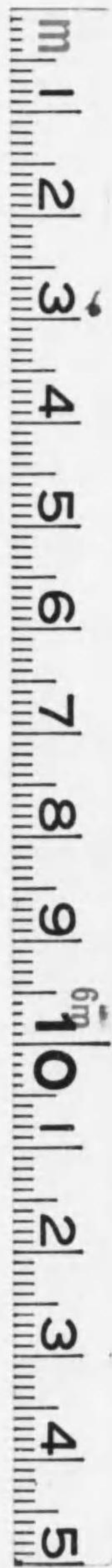


宮幣中社吉備津神社略記

特251

5

320



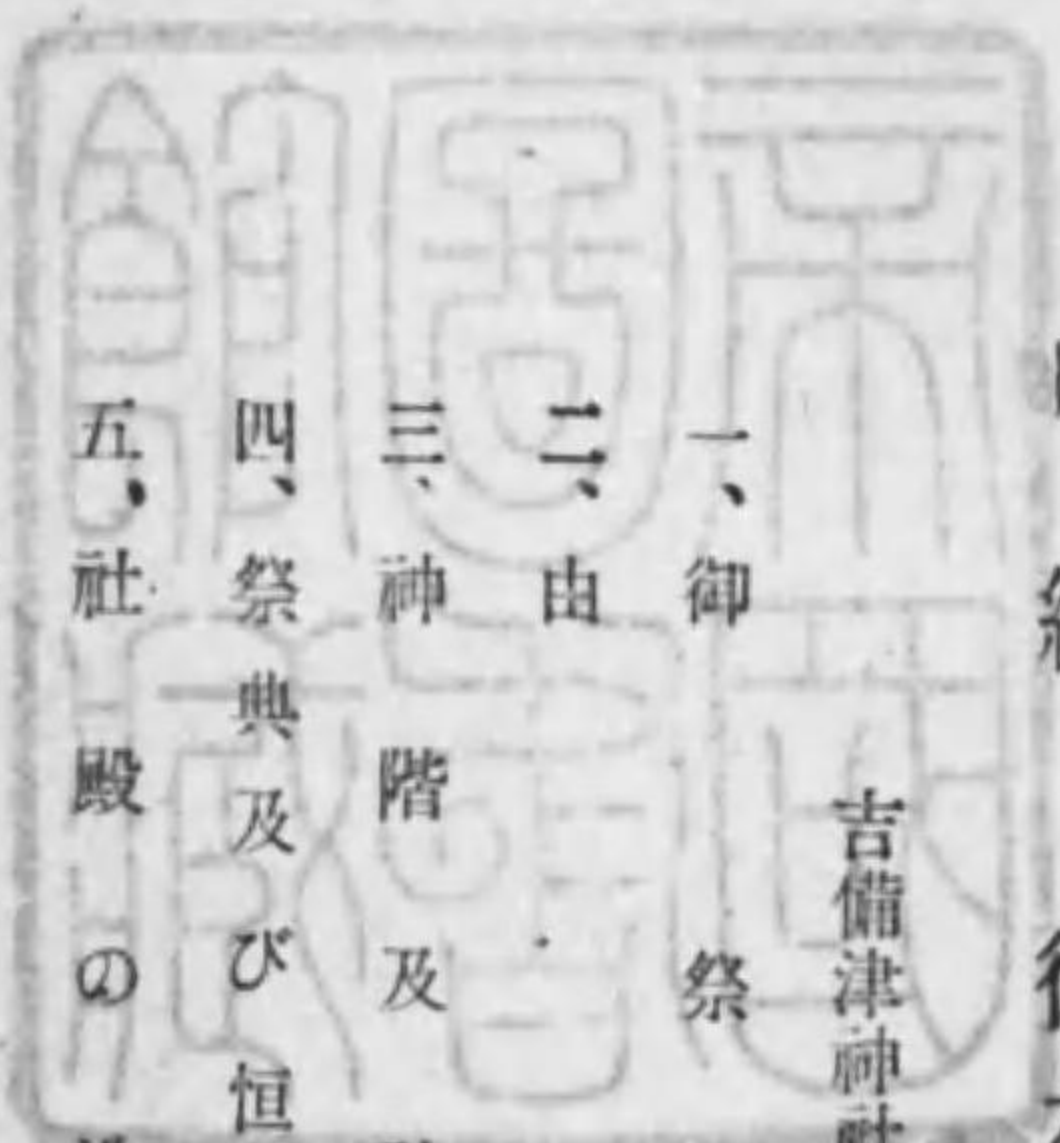
始



特251
320

口繪 御本殿、正面

目次



吉備津神社參拜案内略圖

一、御祭神

二、由緒

三、神階及社格

四、祭典及び恒例式

五、社殿の造營

六、隨神門並廻廊

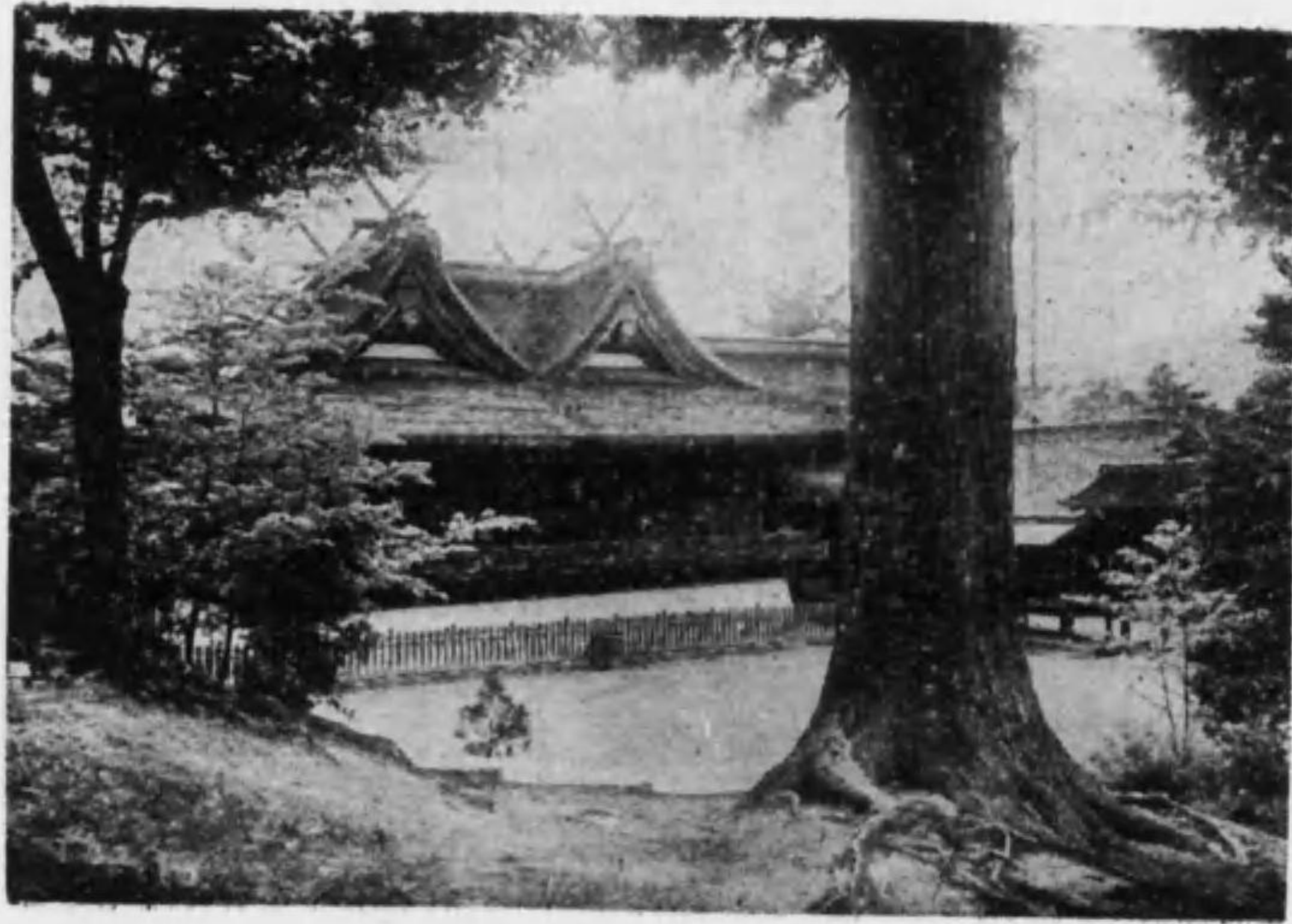
七、御竈殿

八、攝社本宮社其他

附録一

一
二
一
一
〇
五
四
二
一

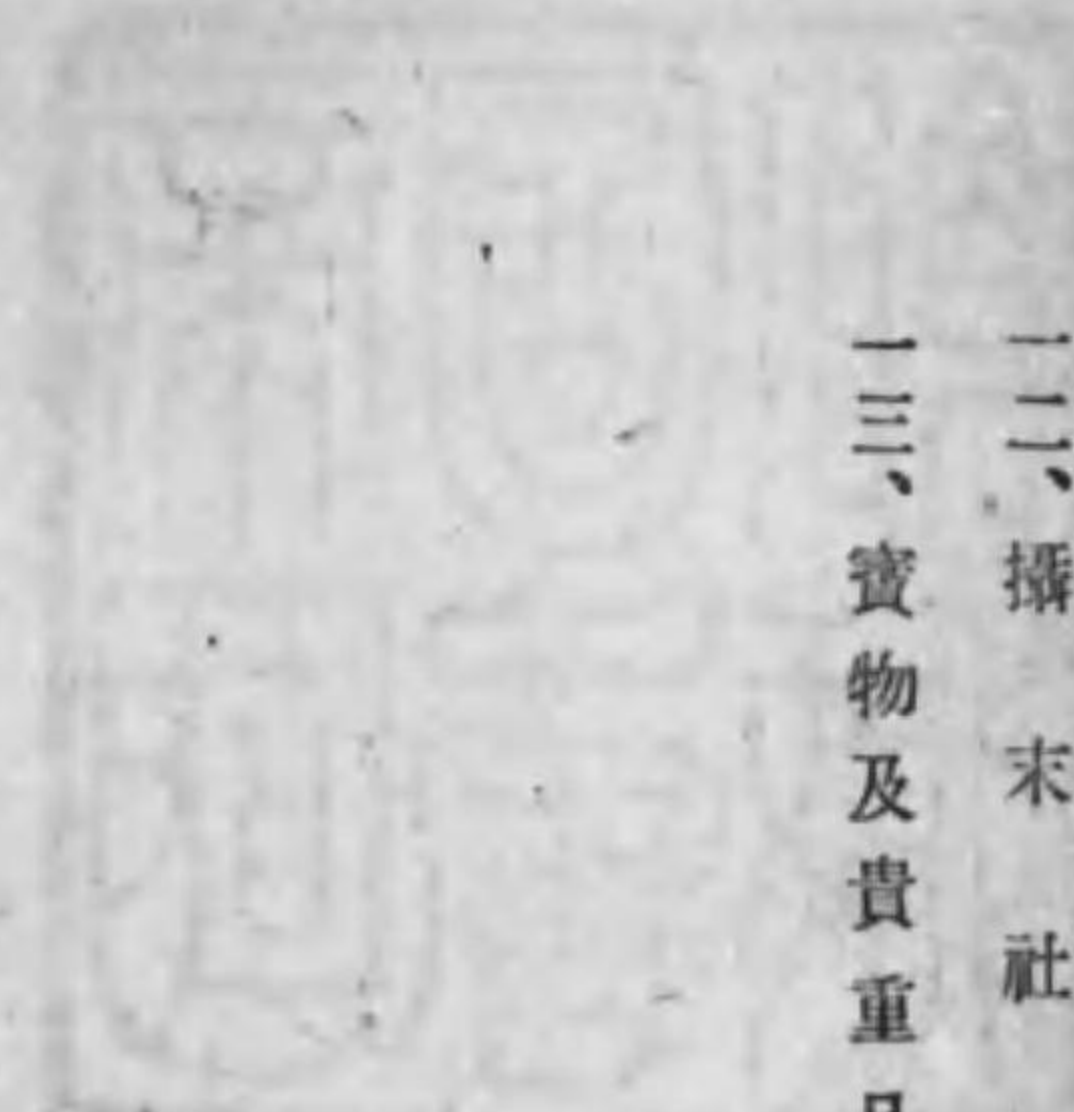




殿 本 御



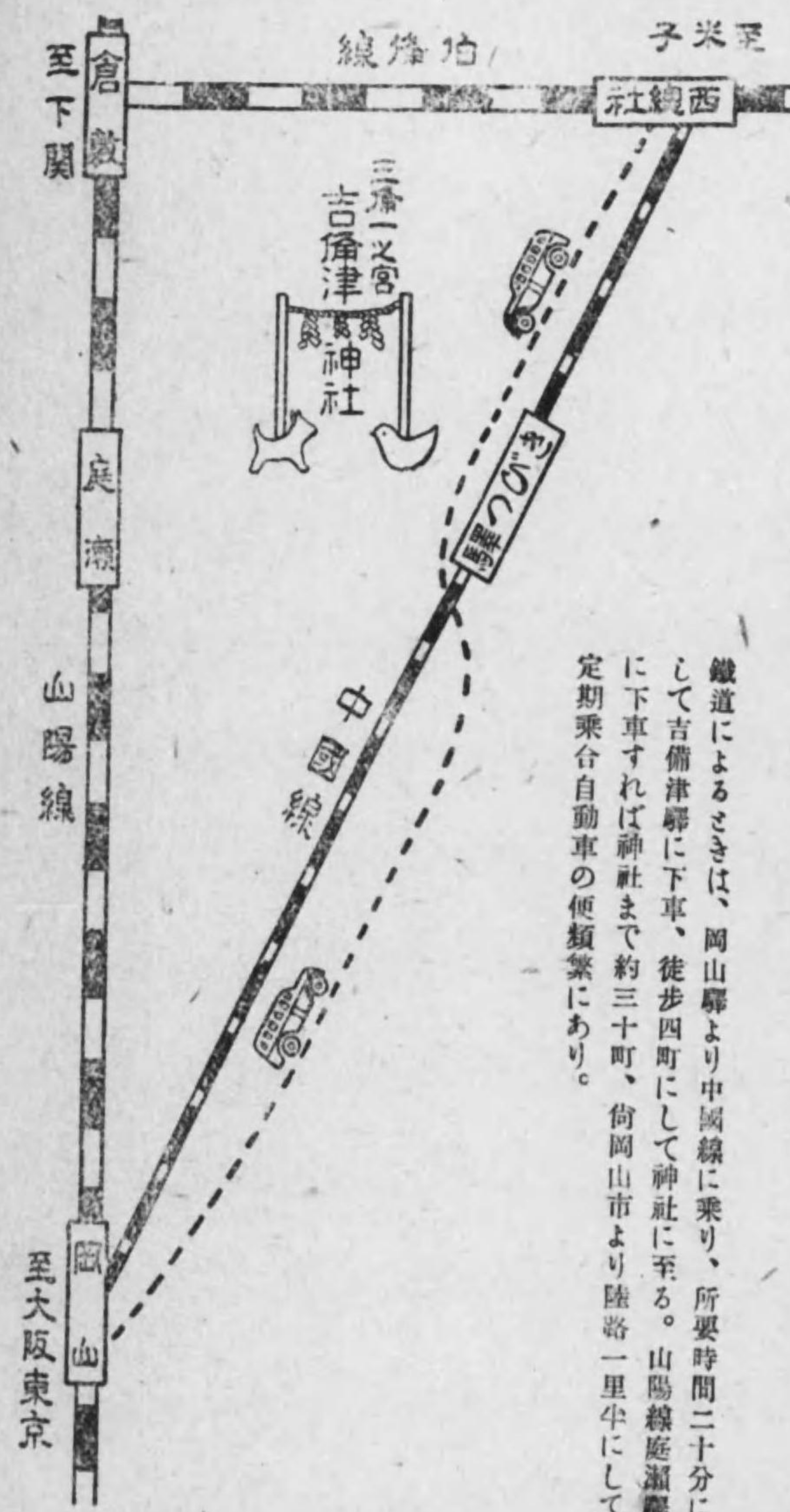
道 参 面 正



九、御	墓	二
一〇、境	内	三
一一、主要社殿、建造物一覽		四
一二、攝末社一覽		五
一三、寶物及貴重品一覽		九



官幣中社吉備津神社參拜案内略圖



鐵道によるときは、岡山驛より中國線に乗り、所要時間二十分に
して吉備津驛に下車、徒歩四町にして神社に至る。山陽線庭瀬驛
に下車すれば神社まで約三十町、尙岡山市より陸路一里半にして
定期乗合自動車の便頻繁にあり。

官幣中社 吉備津神社 略記

鎮座地 岡山縣備中國吉備郡眞金町字吉備中山

一、御祭神

大吉備津彦命

配祀

倭飛羽矢若屋比賣命	中津彦命	御友別命	千々速比賣命	日子刺方別命
-----------	------	------	--------	--------

倭迹々日百襲比賣命

若日子建吉備津彦命

日子竊間命

二、由 緒

眞金吹く吉備中山の麓、細谷川の畔、底津磐根に宮柱太しき立て、鎮まります大神は人皇第七代孝靈天皇の御子に渡らせ給ひ、御名を彦五十狹芹彦命又の御名を大吉備津彦命と申し奉る。蓋五十狹とは勇猛、芹とは邁進の假字なれば其の御性質の雄々しかりしことも推して知らる。御母は倭國香媛と申し奉り、天皇即位の三年倭國黒田の廬戸宮に生れ給ひぬ。

第十代崇神天皇の御代不逞の徒四方に起りて世の中何となく穩かならざりしかば、天皇はこれを鎮めさせんがために皇族の中より將軍を選びて四道に差遣し給ひしが、もとより御性質も雄々しくましましければこの選に漏るべくもあらず、やがて四道將軍の一人として吉備津路に向はせらるることとなり給ひき。

時しも命が出陣の首途に於いてゆるしき叛亂こそ起りたれ。そは第八代孝元天皇の御子に武埴安彦命とよばせ給ふが非望を企て、その妻吾田媛と謀り道を分ちて京師に攻め上り給ふ由聞えければ、命は乃ちこれに向ひ、やがて吾田媛を破り其の餘黨を殲し給ひぬ。かくて安彦命の叛亂も靜まりければ、是より命はその異母弟なる若日子武吉備津彦命と共に吉備津路に向ひ給ひぬ。

當時吉備津路にはいかなる醜類の割據せしか詳ならざれども、社傳に従へば百濟より温羅なる兇賊來りて現今の吉備郡新山の麓に居を構へ、西國よりの貢船を掠め人民を惱すこと限りなかりければ、之を見聞くもの皆恐怖せざるはなく時の人呼んで鬼とは稱しけり。斯る兇賊のありしが上に國史には臆氣ながらも更にこの方面の不穩なる消息を漏らせり。そは當時崇神天皇が出雲の神裔なる太田田根子命を擧げて出雲氏族の祖神を祭らしめ、その懷柔に焦慮し給ひしのみならず、其の將軍を派遣せらるるに當りても、出雲方面には丹波道主命、大吉備津彦命の二將軍を命じ、特に吉備津路にはその弟若日子武吉備津日子命を副はしめられ、更に後出雲振根命の征討に當りては東海に遣はされし將軍武淳河別命をも遣はされけり、是等の事情より綜合すれば當時不穩の根源の儘にこの方面に存せしことを知るに足る。

されば命御兄弟がこの方面に向はせらるるに當りては、警戒をさく／＼怠りなくその播磨に到らるるやことを吉備の道口と定め、氷河の畔に忌鏡を据ゑて軍神を祭り給ひぬ。かくて命は吉備國に入り吉備中

山に陣を構へ現今の郡窪郡片岡山に出でまして、石楯を築き鬼城に向ひたまひて相戦はれしに温羅毎戦利あらず、威勢日に弱り終に相率ゐて降伏し臣下とぞなりにける。依りて土民を綏撫し拓殖を圖らせ給ふ。尋いで崇神天皇即位の六十年には武渟河別命と共に進んで出雲を征し、當時の出雲梟師たる出雲振根命を討ちてこれを誅し給ひぬ。かくて吉備津路悉く平ぎ人民皇化に浴することを得たるは、實に命等の偉大なる御功業御偉徳に因る。其の後御兄弟命は長く吉備の地に留りこの地方を鎮め給ひしが如く、殊に大吉備津彦命は高き齡を以て薨せられけるほどに吉備中山の嶺なる茶臼山に葬り奉る。

三、神階及社格

仁明天皇の承和十四年十一月從四位下に同十五年二月從四位上の神階を授けられしより、文徳天皇仁壽二年三月詔して官社に列せられ四品に進み、其八月には封戸二十戸を給せられ、齊衡二年神庫の鈴鏡一夜に三度鳴れりとして、天安元年夏六月勅使を遣はされ三品を授け給ひ、清和天皇貞観元年正月更に二品に進められけり。又陽成天皇元慶三年二月特に一品を授けられ、後一條天皇寛仁年間京畿七道の諸神に、一代一度の奉幣を定めらるゝに當り當社亦之に與りき。往古より朝廷の御崇敬篤く、維新昭代の世となりて明治四年國幣中社に列せられ、ついで大正三年一月官幣中社に列格せらる。

又大正十五年五月二十三日には、畏くも 今上陛下東宮に在しまし御時、親しく御參拜あらせられ昭和五年十一月十四日陸軍特別大演習を吉備の野に行はせらるゝに當り甘露寺侍從を御差遣御幣物を奠めさせ給ひ、猶昭和十七年六月一日大東亞戦争下民情御視察の爲本縣下に侍從御差遣の岡岡部侍從を御差遣あらせらる。

四、祭典及び恒例式

大 祭 祈年祭二月十七日、例祭十月十八日、新嘗祭十一月二十三日

右三大祭には地方長官幣帛供進使として參向皇室よりの神饌幣帛を供進最も莊嚴なる祭典執行せらる

特 殊 神 事

◇春秋兩季の私大祭 春季は五月十三日、秋季は十月十九日に執行す。即ち十月十八、十九日は命の吉備國御征伐の末、賊徒降服に及び吉備中山に御凱旋ありし日に當れるより、當國の人民四方より集りて御凱旋の式に準へ、神寶竝に大膳七十五臺の饌饌を奉持して長廊を行進供奉する莊觀は稀有の神事として遠近に著名なり。

往時は別に生鷹の御鷲として毎年哲多郡（現今の阿哲郡）より鷹を貢上せりといふ、この生鷹の御鷲は

早くより行はれたるものにして定家卿の鷹百首にも

本しげき吉備の社の生鷹は

すはの鹿より久しかりけり

とあり、即ち有名なる信濃の諏訪神社の鹿の御鷲よりも古く、往時に於いて名高かりしを知らる。

◇松植祭 社傳には大吉備津彦命御在世の砌、鞆津の人千本の松を献れることに因みて行ひ來れりと云ふ。現今は祭典終りて宮司岩山宮に参向し祝詞を奏し小松を植う。思ふにこの神事は後世の國民をして植林事業の忽にすべからざるを示し給へる御神宸より出てたるものといふべし。

◇御煤拂祭 雉の尾を用ひて拂ふ、これは毎年川上郡長田郷より献りしと、宮司二十六日より忌舎に入り無言にて齋戒参籠し、二十八日午前一時禰宜助勤し御神座の御煤を拂ひ終りて直會を賜はる、引續き禰宜主典は攝末社に参向して御煤拂を奉仕す。

大 祭

例 祭 十月十八日

祈 年 祭 二月十七日

新 嘗 祭 十一月二十三日

中 祭

歳 旦 祭 一月一日

元 始 祭 一月三日

紀 元 節 祭 二月十一日

御 誕 辰 祭 三月十三日

正 忌 日 祭 四月十九日

天 長 節 祭 四月二十九日

春 季 祭 五月十三日

秋 季 祭 十月十九日

明 治 節 祭 十一月三日

小 祭

月 旦 祭 毎月一日

月 次 祭 毎月十三日

釜 殿 祭 一月一日

松	植	祭	一月五日
献	穀	祭	一月十日
御	忌	日祭	一月十九日
夕		祭	五月十二日
御	忌	日祭	五月十九日
卯		祭	五月中ノ卯ノ日
播	種	祭	五月中旬
田	植	祭	七月上旬
文	墨	祭	七月三十一日
前	夜	祭	十月十七日
夕		祭	十月十八日
武	德	祭	十月十九日
御	煤	拂祭	十二月二十八日
除	夜	祭	十二月三十一日

攝	社	祭	三月二十三日
本	宮	社	祭
末	社	祭	一月七日
春	日	宮	祭
大	神	宮	祭
岩	山	宮	祭
宇	賀	神	社
八	幡	宮	祭
一	童	社	祭
瀧	祭	神	社
恒	例	式	
春	季	皇	靈
神	武	天	皇
大	祓		

春季皇靈祭遙拜 三月春分ノ日
 神武天皇祭遙拜 四月三日
 大祓 六月三十日

秋季皇靈祭遙拜 九月 秋分ノ日
 神嘗祭遙拜 十月 十七日
 大正天皇祭遙拜 十二月 二十五日
 大 祓 十二月 三十一日
 講社祭
 吉備津講社祭 四月 十一日、十二日、十三日

五、社殿の造營

社傳に依れば、仁德天皇吉備の國に行幸し給ひし時、靈夢にて寂感あり五社の神殿竝に七十二宇の末社等を御創建ありけるが、後冷泉天皇の康平四年十一月二十五日本社炎上あるや、翌五年二月十二日朝廷は公卿を會して再興を議せられ再建し給ひけるに、後村上天皇正平六年十一月朔日(紀元二〇一一年)社務代松田左近將監盛朝等の焼く所となり社殿悉く灰燼に歸せしかば正平二十一年時の天禰宜賀陽宗勝朝廷に愁訴して其の再興を請ひければ後龜山天皇天中七年(紀元二〇五〇年)に至り將軍足利義滿に命じてこれを再興せしめらるることとなり後小松天皇應永八年(紀元二〇六一年)工を起し同三十二年十二月二十九日落成す、其間年を閲ること二十五年、結構の善美を盡せり。これ今日現存せる社殿にして比翼入母屋造の變体にて吉備津造と稱せられ我國無二の形式たり。明治三十五年四月國寶に指定せらる。

六、隨神門竝に廻廊

境内にて最も古き建物は南隨神門にして延文二年の建築に係り、又北隨神門は天文十二年の建築なり。前者は明治四十四年四月、後者は大正二年四月孰れも國寶に指定せられ廻廊は天正七年の建築にして延長百九十二間餘にして全國稀有の建物とす

七、御 竈 殿

鳴動竈殿は慶長十七年安原備中守草壁真人知種の再建に係り、温雜を祀れる處と傳へられ、阿曾女玄米を搔笥に入れて振り、神職前に侍りて祝詞を奏上せば、御竈鳴りたまひ、神明事を承け給へば詳に鳴り、然らざれば荒く鳴る、又時として鳴らず、是れ當社第一の神祕にして其名最も高し。此竈殿に代々仕ふる阿曾女と云へるは、程遠からぬ阿曾村より汚れなき老女を出せり、是は或る夜彦の命の御夢に温羅來りて吾が妻阿曾の羽振が娘阿曾姫をして御竈殿に仕奉らしめ、大命の御食を炊ぎ仕ふべければ、若し世の中に事あれば竈の前に参りたまへ、幸あれば裕かに鳴り、禍あれば荒かに鳴ることを告げたまひし

に因るとぞ傳へらる。

うづなへる神のひびきに鳴るかまの音のさやけき宮どころかな

鈴木重胤

八、攝社 本宮社 其他

◇本宮 廻廊の南端東側にあり。彦の命が御在世の當時、茅葺の宮を作り、御父、孝靈天皇を齋き祀らせ給ひしより、この名ありと稱せられ、現在の社殿は慶長二年宇喜多秀家の造營にかゝれり。

◇新宮 正宮を南に距る八町許りにあり、今は吉備町大字川入に屬す、吉備武彦命を祀る。社傳に據れば往時廻廊は正宮よりこの御社に達し、近頃まで其の間處々に礎石を認めたりといふ、今は本宮社に合祀し奉る。

◇内宮 吉備中山南部の山上にあり、大吉備津彦命の妃、百田弓矢比賣命を祀れり、之も亦今は本宮社に合祀し奉る。

◇岩山宮 本社正宮の後方にあり、もと、生石大明神といふ。地主神、即ち建日方別神を祀る。建日方別は吉備兒島の別名にして國魂の神なり。

本社正宮と以上本宮以下の四社を併せ稱して往時は吉備津五所明神といへり。

九、御 墓

御墓は本社を距る東南約五町吉備中山茶臼山の嶺にあり。此地は南、兒島灣を望み遠く讃岐の象頭山と相對し、東、岡山の市街を遠望し、西南及び御墓の周圍には繁茂せる松杉長へに緑を帯びて四時の眺望誠に絶佳なり。御墓は馬頭の陵と稱して南方に面し連らなる小丘二つに分れ、北に位せるは大に南に位せるは小にして、東西五十七間南北百八間周圍三百三十間高さ凡そ八間あり、何れも頂上は小石を以て疊みあり面積五千九百坪と稱せらる。

十、境 内 八萬八千五百拾參坪

境内地は元九萬壹千九拾坪と傳ふ、明治十年四月壹萬四百六拾八坪八合を境内と決定（平地五千貳百坪九合、山林五千貳百六拾七坪九合）す。明治三十九年六月二十二日七萬四千七百九拾參坪貳合國有林野法第三條に依り境内に編入許可相成り、明治四十四年三月十日地種組換す。大正四年三月八日無格社宇賀神社を飛地境内神社に編入許可あり、此の境内壹千九拾八坪を加ふ、更に大正九年九月二十四日松馬場壹千四百七拾四坪を飛地境内に編入せられ、昭和四年一月七日辻小路千五百八十三番地參拾七坪千五百八十四番地四百五拾九坪、馬場町九百十七番地八拾參坪を飛地境内に編入許可ありて現在に至る。

春末社 日宮				大末社 神宮				岩末社 山宮			
市大火須天宇經天武 杵穴之佐迦兒 鳥車迦之御大屋 姬運土男魂主根 神神神神命命命				天 照 大 神				建 日 方 別 命			
殿本				殿本				殿本			
年 建 月 日	坪 數	桁 梁 行	構 造	年 建 月 日	坪 數	桁 梁 行	構 造	年 建 月 日	坪 數	桁 梁 行	構 造
明治二十五年十月	〇、四	一〇、四 〇〇	流 造 板 葺	明治二十五年十月	〇、四	一〇、四 〇〇	流 造 板 葺	明治二十五年十月	五、一	二、〇 七	入 母 屋 造 柿 葺

本攝社 宮社												社 名
字眞温百大細配樂留犬吉百大 慈布田倭比紀々々玉備川倭 香留羅玖比武森森玉武武 比留羅阿禮比賣森彦臣彦彦 古之神命命命命命命命命 命命命命命命命命命命命												祭 神
殿拜				殿釣				殿本				設 備
年 建 月 日	坪 數	桁 梁 行	構 造	年 建 月 日	坪 數	桁 梁 行	構 造	年 建 月 日	坪 數	桁 梁 行	構 造	
慶長二丁酉年十一月 宇喜多秀家	一〇、〇	五、〇 〇七	平 屋 造 瓦 葺	明治四十五年三月	四、三	二、五 〇〇	平 屋 造 瓦 葺	慶長二丁酉年十一月 宇喜多秀家	八、九	二、三 〇四	流 造 檜 皮 葺	

十三、寶物及貴重品一覽 (重なるものを抜記す)

名	稱	員	數	品質形狀寸法	作者	傳來
一切	經	九八〇册		橫紙本 一尺朝 九寸三 八寸五分	小西藩津守 坂田丹波守 寄附	

末社 宇賀神社							
宇配須豐火事猿少綿留樂大大巨菅 之受佐祀迦 山山 玉津彦田代迦 原智 森 玖比之 御 守祇 彦 臣見名彦主都 賣男 魂 神磨命神命命神命命命命命命命							
殿 拜				殿 本			
年	坪	桁梁	構	年	坪	桁梁	構
建				建			
月				月			
日	築	行	造	日	築	行	造
未	二、八	一、一〇 二、〇四	平屋造瓦葺	明治四十三年十月	三、五	一、〇五 二、〇五	流造瓦葺
詳							

末社 瀧祭神社				末社 一童社				末社 八幡宮			
瀧織津姫命				小大配宇德菅火金瀧速天 穴祀迦川之織須 彦 車之家原久彦 津佐 名運 魂康 榎 姫男 命命 命公神命命命命命命命				譽田別命			
殿 本				殿 本				殿 本			
年	坪	桁梁	構	年	坪	桁梁	構	年	坪	桁梁	構
建				建				建			
月				月				月			
日	築	行	造	日	築	行	造	日	築	行	造
元祿年間	一、三	一、〇八 一、一九	流造瓦葺	明治四十二年二月	四、三	一、〇四 一、七一	流造柿葺	明治二十五年十月	〇、四	一、〇四 〇、〇四	流造板葺

鏡	扇	扇	書	文	禁	緣	釜
內					制	起	
圖	額	額	翰	書	書	書	
壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
枚	面	面	軸	通	軸	冊	個
橫堅紙	橫堅繪	橫堅繪	橫堅紙	橫堅紙	橫堅紙	橫堅紙	深口鐵徑
本	本	本	本	本	本	本	
四三	五三	二一	一四	二七	一一	五七	一尺三寸九分
着	尺六	尺七	寸四	尺七	尺五	寸七	六寸七分
尺尺	寸尺	寸分	寸分	寸分	寸分	寸分	
元祿四年午九月書	圓山應舉筆 藤田某寄附	巨勢金岡筆	天正七年 清水長左衛門宗治花押	辛未六月國幣社 加列達書	天正十年 羽柴筑前守花押	正德年間	林阿 氏曾 作村

刀	弓	刀	龍	古	高	風	鬼	源
					麗	月		氏
			鉢	面	犬	燈	面	書
壹	壹	壹	壹	十一	壹	壹	壹	六
振	張	振	個	面	對	個	面	枚
長	長竹	長鐵	橫碑	橫堅杉	高杉	堅鐵	橫堅杉	橫堅紙
								本
二尺三分	六藤	七尺四寸六分	四	六八	三着	七寸五分	一尺四寸五分	一尺五寸七分
	尺卷		尺	寸五分	尺色		寸分	寸分
宗	池寶 田曆 繼十 政三 寄附	法 安二 年藥 師寺 彌五 郎寄 附	飛 彈甚 五郎 作	雲 慶 作		源 賴政 寄附		土 佐光 起筆
近								

425
384

不許
複製

昭和十七年十月一日修訂十版發行

著者兼發行者

岡山縣吉備郡真金町

官幣中社吉備津神社々務所

右代表者 橋本甚一

印刷所 柳本印刷所

岡山縣吉備郡總社町大字總社三六〇

(電話1111)

棟	法華經	古文書	古文書	吉備津宮惣解文集書	緣記	六歌仙	釣鐘	刀
壹枚	八卷	壹通	壹通	壹通	壹卷	六枚	壹個	壹振
橫 檜	橫 紺紙	橫 紙	橫 紙	橫 紙	橫 紙	橫 桐板	高 圓	長
八尺七寸	二七寸五分	二七寸五分	一尺四寸三分	一尺四寸三分	一尺四寸三分	一尺四寸三分	四尺四寸九分	八寸七分
明和六年屋根葺替	日蓮上人筆 肥後守加藤清正寄附	正應元年 吉備津宮へ仁和寺ヨリ	元弘二年二月 地頭源親家ヨリ吉備津宮政所へ	應永元年甲戌奥書アリ	延長元癸未歲 善操寺沙門圓會僧正筆	作者並傳來不詳	永正十七年庚辰卯月九日ノ銘アリ	備前國住雲次寄附銘アリ

終

